法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-11

白樂濬(ベックナクジュン)と南原繁における教育理念と政治思想の展開(1) : 二人の「伝統」と「西欧」思想に対する認識を中心として

CHOI, Seonho / 崔, 先鎬

(出版者 / Publisher)
法学志林協会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法学志林 / 法学志林
(巻 / Volume)
104
(号 / Number)
1
(開始ページ / Start Page)
67
(終了ページ / End Page)
117
(発行年 / Year)
2006-10-27

Hosei University Repository

白樂濬（ペックナクジュン）と南原繁における教育理念と政治思想の展開（一）

――二人の「伝統」と「西欧」思想に対する認識を中心として――

崔　先鎬

はじめに
第一章　白樂濬（ペックナクジュン）における教育理念の展開
第一節　教育における伝統文化の強調
Ⅰ　学問における実践的態度の強調
Ⅱ　思想的理解としての教育観分析の選択
Ⅲ　啓蒙的思想としての社会進化論およびマルキシズムの展開
Ⅳ　白樂濬と崔鉉培（チェヒョンベ）、二人の知識人における学問的背景
第二節　大学における教育体系の変動
Ⅰ　制度教育の導入過程における試練期
Ⅱ　植民地解放後の韓国における教育自治制度導入
Ⅲ　伝統文化に対する愛着――実学を通した文化の実践
Ⅳ　知識水準の向上による文化認識の実践――朝鮮文庫および延世大学国学研究院の設置
第三節　言論復興と白樂濬
Ⅰ　国民思想研究所と雑誌『思想界』――鄭寅普（ジョンインボ）の「陽明学演論」掲載
Ⅱ　マスコミに対する白樂濬の認識に内在する思想的背景――梁啓超（ランチチョオ）（一八七三―一九二九）らによる「変法自強運動」の影響から延世大学新聞科学研究所の設置に至るまで（以上、本号）
第二章　南原繁における教育理念の展開
第一節　「文化」の役割に対する考察
Ⅰ　南原繁における教育理念の基礎としての文化

Hosei University Repository

Ⅱ　戦前教育の根拠としての民族社会主義に対する批判および文化概念の志向
Ⅲ　戦前におけるフィヒテの知識学と南原繁による思想的応用および評価
Ⅳ　戦後教育と社会体制の目標としての文化共同体論
第二節　米国対日教育使節団の『報告書（Report of the United States Education Mission to Japan, 1946. 3）』に対する意見
Ⅰ　占領後の教育体制の変化
Ⅱ　戦後日本の大学における教育改革に至るまでの試練——戦前の滝川事件（一九三三年）からサンフランシスコ講和条約への関与まで——
第三節　敗戦直後の大学に対する問題意識
Ⅰ　戦後、日本の大学復興の傾向
Ⅱ　南原繁、矢内原忠雄の残した課題——南原繁の「新日本文化の創造論」
第三章　二人の思想における共通点および相違点——彼らにおける教育観形成の基盤としての思想
第一節　白樂濬における「伝統」認識とキリスト教
Ⅰ　教会史研究の動機
Ⅱ　教会史研究の学問的姿勢
Ⅲ　朝鮮におけるキリスト教の位置
Ⅳ　朝鮮における教会史研究の意義
第二節　伝統的価値に対する南原繁の西欧思想観
Ⅰ　南原繁における宗教哲学観
Ⅱ　知識人における「無教会主義」の展開と「平和論」および伝統思想への愛着と宗教的信念——信仰的先駆者としての内村鑑三・矢内原忠雄
Ⅲ　南原繁における平和思想の原型としてのカント思想——受容と評価
Ⅳ　戦後教育における平和思想の役割
第三節　二人における伝統と歴史認識
Ⅰ　価値としての知識における使命と役割
Ⅱ　「奉仕（serving the community）」とヒューマニタリアニズム（humanitarianism）に対する彼らの立場
Ⅲ　知識人における共通の価値および目標——むすび——
あとがき

Hosei University Repository

はじめに

白樂濬（ペクナクジュン）（L. George Paik, 一八九五―一九八五）は、近代韓国におけるあまたの知識人のなかでも、以下の点で特筆に値する最も注目すべき人物である。彼は、西欧の思想及び教育制度の導入と共に、韓国の思想界及び教育制度を革新するために努力した知識人の一人であった。特に彼は、国家中興の源泉を「教育」と見て、一生を教育事業に献身した人物でもあった。

彼は、朝鮮半島・韓国における近代史の四つの大きい分岐点であった①一八九五年～一九一〇年の朝鮮王朝及び大韓帝国の末期、②一九一〇年～一九四五年の日本による植民地統治期、③一九四五年～一九六一年の植民地からの解放、朝鮮戦争、独裁体制期、④一九六一年～一九八五年の軍事政権期、という激動の時期を生き抜いた時代的先駆者である。

朝鮮王朝及び大韓帝国の末期から日本による植民地統治期に掛けて少年期を迎えた彼は、開化運動家であった安昌浩（チャンホ）、崔益鉉（チェイクヒョン）などの人物による思想の影響を受けると共に、西欧の「新学問」と接して、西欧文化に関心を持つようになった。特にアメリカ留学の時期（一九一六～一九二七）には、歴史学と神学を学ぶ過程の中で学問的「方法論」を把握し、なおかつ、欧米における「民主主義」に関心を持つようになった。

『朝鮮におけるプロテスタント教会の歴史、1832～1910（The History of Protestant Mission in Korea, 1832-1910）』と題した論文でイェール大学（Yale University）にて博士学位を取得した白樂濬は、帰国後、現在の延世（ヨンセ）

Hosei University Repository

大学（Yonsei University）の前身である延禧（ヨンヒ）大学の教授となった。延禧大学の文科の教授として勤めていた時期（一九二七―一九三八）には、同僚の崔鉉培（チェヒョンベ）、鄭寅普（ジョンインボ）、白南雲（ペクナムウン）、李順鐸（イスンテク）などと協力してハングルによる教育の実施などを基本とした「朝鮮語学会」を開き、母国語によるエリート教育を試みたが、朝鮮総督府により発覚、教授職を剝脱された。[1] 日本による植民地統治が終わった後、大学に戻ってきた白樂濬は、植民地解放後の延世大学に初代総長として就任し、伝統的「知」「徳」「体」理念と共に、プラグマティズムに基づく教育理想を兼備した自らの教育理念によって、理工教育などのより実利的な教養教育の導入および男女共学制度を導入した。[2]

また、国家の教育担当部署である文教部の長官として在任した頃、彼は、「弘益人間（ホンイックインガン）」育成を教育理念として立て、「義務教育制度」と「教育自治制」を拡大実施した。朝鮮戦争中には「戦時露天教育」と呼ばれる戦時中の学校教育事業の実施と共に、戦時連合大学の設立にも積極的に貢献した。[3]

一方、南原繁（一八八九―一九七四）は、近代日本における西欧思想及び学問の紹介者の一人であると同時に、戦後の日本の人々にとっても重要な「普遍性」を探り続けた思想家でもあった。彼は、知識人エリートの一人として多様な手段をもって自らの見解を表明し、且つ、展開させていった。彼の知的世界の内部には、近代日本の歴史的、思想的課題と共に、自らの精神形成の過程の中で生じた近代日本の歴史・思想における本質的課題が込められていると思われる。本論は、拙論である『南原繁における超国家主義批判に関する考察』（二〇〇二年度法政大学大学院修士論文）を踏まえた、より総合的な考察の「必要性」というところから出発している。今回は、同時代の朝鮮半島における知識人であった白樂濬（一八九五―一九八五）を第一に取り上げ、対比させることによって、彼らの思想における共通点と相違点を明らかにして行きたい。

Hosei University Repository

現在の東京大学の前身である東京帝国大学の戦後初代の総長となった南原繁は、戦後の日本における教育改革に深く関与している。まず、教育改革については、それが文化的「共同体」概念に根ざした民主主義的政治社会の形成にとって、最重要の前提条件を成すとの観点から、高等教育機関進学への機会均等の保障などのため旧制高等学校の廃止を含む大幅な制度的再編成を行なった。また、憲法案に対して、南原は「個」に基づく自由主義的民主主義の原理の必然性を認め、その実現を積極的に肯定しつつも、戦後の日本の社会体制における「自主性の欠如」を指摘、「伝統的文化」と断絶している点、および新しい価値原理の定着を妨げる障害として認識、批判した。

このような南原の態度は、絶対的文化価値としての日本の「伝統文化」意識を始めとする価値観に基づいていると考えられる。南原は、「個」に基づく自由主義的民主主義は、それ自体が「多様性」を実現する基盤として、政治的価値を保持するものとしての「自由」の実現に直結していると考えていた。[4] そのために彼は、長い歴史を通じて形成されてきた文化的「共同体」こそが、新しい時代を開くための最も重要な要素であると主張したものと判断できる。

南原の価値観は、普通の「文化的」価値だけではなく、その内部に存在する精神的価値に由来すると考えられる。現実に対する彼の態度は、内在する精神を含んだ「文化的価値」と密接な連関があると私は推察している。

以上のような理由から、南原の価値観、また戦後改革に処する彼の観点と態度がいかなる形態で社会に反映され、その価値観の究極の点が何処かについて、白樂濬と比較し、考察することは非常に重要な当為性ならびに妥当性を持つと思われる。

東アジアの時代と歴史は、一九世紀以後、急激な変化を重ねていると思われる。このような転換期において我々アジアの文化が如何なる変化を経験して今日に至ったのかを振り返り、なお且つ、このような時代において知識人たち

Hosei University Repository

の先駆的意識をこの時代の文化と思想の方向設定の参考にすることは大変意義あることであろう。

以上のように、私はこの論文の中で近代歴史において、韓国と日本、それぞれの国における二人の知識人、白樂濬と南原繁が選択した思想世界に基づいて、彼らの価値観を形成したいくつかの原因および契機などをより具体的に分析する。その上で、「近代」意識の展開の意味を検証すると共に、そのような「近代」的意識の展開が現実世界に与える教訓について総合的に比較、考察して行きたい。

まず、朝鮮半島における近代化と戦後改革への転換を主導した知識人の性向は大きく二つの流れに分かれると考えられる。その一つが、伝統的な朱子学を守って西欧のキリスト教思想の打破を主張した近代朝鮮時代末期の「衛正斥邪派」の思想に基づいて改革の実行を試みた「伝統志向知識人」である。長い歴史の中で成熟してきた自らの「伝統文化」のうち、足りない部分を補完的に拡充して、その「伝統文化」に基づく新しい文化と制度を開こうとしたのが彼らの主張であった。

この一方、もう一つの知識人の流れとして、西欧の文化および文物の直接輸入を含む全く新しい形態の「近代化」の方を志向した「近代化志向知識人」がある。彼らは、古き伝統文化を打破し、先進的な西欧の「新文化」の積極的受容こそが近代化であるという観点を持っていた。

より大きく拡大して考察してみると、近代の日本においても同様な「二つ」の相異なる流れが存在してきたと思われる。かつ、この「二つ」相異なる流れの中からそれぞれの国において一致する共通的思想を有する知識人を対象に比較・検証を行うことは可能なのではないかと考える。

ただし、朝鮮半島における近代化と戦後改革への転換を主導した「近代化志向知識人」たちの間にも、その方法論

Hosei University Repository

においては多少の差が存在した。西欧から入って来たキリスト教宣教師および教員、そして朝鮮半島に対して植民地政策を行った日本などを通じて新文化を受け入れようとした試みがあった。また、もう一方では、より積極的な「近代化」を実現させるため、西欧世界への留学の方法を選んだ場合もあった。このような留学派知識人による積極的な受容、そして日本などを経由して入ってきた学問および制度は、すぐに「伝統文化」に影響を与えた。この時期の新文化の受容と関連したこのような事情は、いわゆる「啓蒙主義小説」にもそのまま反映されている。ここでは、海外への留学と新教育による文化の受容、新制度の建設こそがこれからの進むべき方向として設定された。白樂濬は、このような「啓蒙主義小説」の主題を構成する主役たちが志向していたその実現的目標を直接現実的に設定・実行することによって、この時代の伝統文化の刷新に肯定的に寄与した典型的エリート知識人とも言えよう。

一方、南原繁は、日本における「伝統文化」に対して愛着を持ちつつ、西欧の思想および制度を戦後の日本社会に積極的に受容しようとした。したがって、「伝統文化」に対する彼らの「認識」と「実践」的作業が戦後の韓国と日本、それぞれの国における学問と文化、制度の成立と発展に如何なる形で寄与してきたかについて検証することは、非常に意味ある重要なことであると思われる。

この二人に関する比較を視野に入れた先行研究は、これまで、各国における学者たちによるそれぞれの人物に対する研究以外に、比較などは行われてこなかった。私の研究が目指していることは、このような観点から白樂濬と南原繁の「伝統文化」に対する認識とその「実践」に従って、その原動力と契機などについてより具体的に考察するとともに、今日の社会において彼らエリート知識人たちが残した思想の痕跡を探ることである。

Hosei University Repository

第一章　白樂濬における教育理念の展開

第一節　教育における伝統文化の強調

Ⅰ　学問における「実践的態度」の強調

白樂濬における最も主なる教育理念、それは世界中の学問との交流を通じた「学問的繁栄」であって、そしてその学問の「実践」であった。彼は、この「学問的繁栄」と「実践的態度」が、究極的には民族と人類の繁栄に繋がると判断した。彼の教育思想とその哲学における構造を整理するためには、韓国教育の歴史的現実の中で、彼が関与したことを資料として、その思想の契機、理念的性向、価値観および人間観などについて帰納的に追跡し、類推する必要があると思われる。この過程の中から、彼が残した文書に表出された理想と信念、そして価値観などを点検し、彼が主張した「学問的繁栄」と「実践的態度」などの理念が、いかなる形で社会に反映されているかについて検証してみることができるだろう。

しかし、彼の思想的理念を検証した上で必要とされるのは、正統的な思想史のなかにおける彼の価値的立場を検証、整理するためではない。それよりは、彼が習得・研究を行った学問、すなわち歴史学・神学・政治学・宗教歴史学、教育学、修辞学などの学問が有する性格と彼が生きた時代と環境的背景から習得した思想的立場がどのようなものだ

Hosei University Repository

ったのかに対する答えを探ることでもある。このような質問に対して、いかなる答えを類推することができるだろうか。ここで、彼の思想と教育理念の性格を整理する必要があると思われる。私は、それを「実学」、「民族愛」、「理想主義」の三つの流れにまとめることができると思っている。

白樂濬の思史における三つの流れの中で、最も重要な意味を持つものが「実学」であると思われる。彼は、延禧(ヨンヒ)大学の教授と勤めていた頃、実学研究の契機に備えて、自らの教育方法における実学的原則を積極的に導入・活用したと考えられる。その内容と方法論だけではなく、教授採用と教授構成においても彼は、学閥、思想の傾向、宗教などの一般的基準に拘泥せず、学生の教育そのものに中心をおいて、より多用な背景の人物を招聘しようとする努力を傾けた。彼のこのような方針は、いわゆる西欧型の「功利主義的教育」の実現という理念とも通じるところがあると思われる。

一方、彼の主なる主張でもあった世界中の学問との交流を通じた「学問の繁栄」と「実践的態度」という理念は、朝鮮時代後期の実学者丁若鏞(ジョンヤックヨン)のような近代実学運動の主役たちとも多くの共通点を持つ。白樂濬は、一九六七年一一月三日に延世(ヨンセ)大学東方学研究所主催の実学講座で次のような講演を行った。

> 私の教育理念の中で最も基本になるものとは「実践的態度」である。それは、近代の学者たちによって主張し続けて来られた実学精神の基本でもある。……近代の実学者たちは、このようなところから国政と厚生の方向を決めてきた。従って、彼らは全ての国家的・社会的問題はもちろんのこと、個人の生活においても、この「実践的態度」を最優先すべき要素と判断したのであろう。(5)

Hosei University Repository

ここで説明した「実践」の理念こそが彼自らが決めた原則とみても良いと言えよう。

次に、「白樂濬が主張した「民族愛」思想とは、「国粋主義」、或いは「排他主義」を意味してはいない。日本文化への同一化から解き放たれ、禁じられた「郷土愛」を回復することを願っていたに過ぎない。ここで彼は、民族に適切なイデオロギーを選ぶために、むしろ世界との「均衡」と「調和」を強調している。

彼はこのような「均衡」と「調和」が、多くの人々に民族の「伝統文化」が効率的に伝わる方法、社会の変化に適応しつつその社会的変化を主導できるような人材を育成する方法、そして、教育を行う「既成の世代」の立場よりは、その教育を受ける立場の「未来の世代」を中心とした教育方法などによって可能になると判断したのである。(6)

「人格教育を重視し、民主的独立国家の国民が持つべき品格の陶冶」と決めた戦後教育方針をその初めとして、教育の方法論においては皮相的な模倣を警戒した。また、知識教育においては、「正確性」と「徹底性」を強調することによって教育水準を向上させようとした。(7) ここからは、彼自らの意欲的教育方針を通じて国民の底力を一段階高め、これからの教育制度および思想が進むべき方向を確立させようとした痕跡を発見することができるだろう。以上のような理由に基づいて考察する場合、白樂濬を「民族愛」を重視した思想家として、その性格を規定する十分な根拠になると判断できるのである。

そして、白樂濬は、道理を重視した教育理念が志向する究極点が、「弘益人間（ホンイックインガン）」(Maximum Service to Humanity)」の理念の実践であると語った。(8) 彼は、「広く人間を有益にする」という意味の「弘益人間」の理念を実現するために必要なものとして、人格の陶冶、民族的自尊心の兼備、そして公共の利益を追求し世界文化に貢献することな(9)

Hosei University Repository

どを規定した。このような彼の教育理念は「世界平和」という人類全体の理想に帰結できると思われる。著書『我が最終講義録』の「世界平和」という章の中で彼はこのように語っている。

「世界平和」とは人類の理想である。その理想が生きている限り、いつか実現できる日が来るだろう。そのため、我々はそれを「理想」と呼ぶものであって、「空想」とは呼ばないのであろう。(10)

白樂濬の教育理念における理想主義は、もちろん、観念的理想主義ではない。しかしこれは、彼自らが「実践」し、その「実践」の土台の上に成り立ったものであろう。それは現実的側面を兼備した理想主義的思想とも言えよう。彼の思想が教育に関する単なる空想で止まらず「理想」となれる根拠は、彼の「実学」志向の理念、すなわち、プラグマティズム内部に存在すると考えられる。このような理由に基づいて彼は、その「現実的改革」と「実践」に着手したのであろう。

彼は、韓国が日本の植民地から解放された直後の一九四六年、現在の延世大学において韓国では初めてとなる「男女共学制」を実施した。以後、政府の教育担当部署である文教部の長官を併任するようになった白樂濬は、関連部署の多くの行政官僚たちの反対にもかかわらず、「男女共学制度」拡大を建議するとともに「教育自治制度」の発足を成功させたのである。

また、白樂濬は、「教育」の本来的な意義は「自己実現（self-realization）」および「奉仕（serving the community）」精神にあると語っている。このような思想に基づいて、彼は、教育の本来的意義である「奉仕」とは、自発

Hosei University Repository

的に他者の立場を理解し、その他者のために行う「利他行為」であると定義した。そして、このような「奉仕」とは「自己実現」と発展だけではなく、本当の意味での「幸福」を招来するものであることから、「奉仕」そのもの自体が重要であると主張した。[11]

一九四五年、在朝鮮アメリカ司令部軍政庁（USAMGK, United States Army Military Government in Korea）[12]による「韓国教育審議会」が編成され、教育担当部署であったその第一分課において教育理念を案出することになった時、白樂濬はその教育理念として「弘益人間（ホンイックインガン）」を提案した。彼は「弘益人間」を'Maximum Service to Humanity'に翻訳することをアメリカ軍政庁へ同時に提案したのである。ここで言った「弘益人間」とは、包括的には「知」「徳」「体」を兼備した人間を指すと共に民族と世界に奉仕する利他的人間を意味していたと考えられる。一方では彼が主張した「弘益人間」が、朝鮮半島における建国神話の「檀君（タングン）神話」に着眼点をおいたという意見もあるが、むしろ彼の思想の基礎であったキリスト教的「奉仕精神」が教育理念として提示されたと解釈できるであろう。

そして、白樂濬は、このような個々人の人格の完成の上に西欧の民主主義を新たな社会体制の主なるイデオロギーとして導入することを夢見たのである。民主主義社会体制に対する彼の信念は、「近代化」の要諦を「縦軸的」社会体制から「横軸的」社会体制への転移として把握したところに見いだすことができるであろう。彼は、「最近、既存の権威主義を清算して、民主主義を確立しようとする声が聞こえる。民主主義社会体制とは、不当な権威に服従する『縦軸的』社会体制ではなく、お互いに奉仕し合う『横軸的』社会体制を指す」[13]と規定している。そして、この「横軸的」社会体制における生活方式こそが、お互いによる「奉仕的」生活方式であるということを主張したのである。彼は、民主主義について次のような意見を示した。

Hosei University Repository

We should not be apologetic in declaring that democracy is the goal of history. Mankind has one single origin and one single goal. When the light of democracy becomes dim like a glimmer of an ambiguous symbol, we get discouraged, depressed, and frustrated. Progress becomes impossible when good people stop working. Let us renew our faith in progress and rise up for the final victory of democracy.(14)

彼の言う民主主義とは、個人の「自己」の表現と発展のための最も重要な手段であった。彼は、個々人における「創意的精神」が歴史と社会の発展に繋がる基礎となると判断していた。同時に、このような「創意性」を有する人間の人格的尊厳性を尊重する部分こそ、民主主義の評価すべきところであると確信していたのである。彼は、「個人」における人格と自由を侵害する、如何なる形の思想と社会体制も排除すべきであると語っている。一九四八年に開かれた「ユネスコ（UNESCO）世界人権共同宣言」草案起草会議に参加した経験に基づいて、彼は、人間の自由な「権利」である「人権」の意味を覚醒した上で、これを守って擁護すべきであると主張した。

特に白樂濬は、教育を通して民主主義を定着させることに尽力した人物でもあった。彼は、究極的には民主的な社会教育を実現するため、教育内容および教育制度における民主的運用と共に、教員が民主的教育を実行できるような量的・質的向上が必要であると力説した。彼は「民主国家とは、『民』によって自主的に運用されるものである。『民』による国家運用を実現するための最も重要な事業が『教育自治』の制度的完成である」と語った上、国務議員文教部長官として、一九五二年六月末から教育自治制度が実施されるよう国会に提出したのである。このように、白

Hosei University Repository

樂濬における思想と学問は「教育」というひとつの要素に凝集していると考えられる。民主主義の実現のため、白樂濬が最も重要視したことが「人格の陶冶」である。彼は「道徳性教育」による人格の完成の上に「民主主義」は成り立つと見ていた。

今日を生きる我々の「道義標準」とは何か。これを「民主主義」という一つの要素を通して説明してみよう。一般的に「民主主義」というと政治的・制度的側面だけに限って把握する場合が多いが、それは政治的・制度的理念にあると同時に、我々人間が「精神的豊かさ」を維持していくための「法則」でもあろう。[15]

これは、「民主主義」とは政治的・制度的側面だけでは完成不可能なものであり、個々人において「人格」が備えられる時にその意味を発揮するという内容で理解することができる。彼は、個々人における「人格の陶冶」と「民主主義の実現」を同一の脈絡で判断していたと考えられる。

「道義的教育」は、個々人の「人格」が円満に発揮できる時に可能となる。「人格」を啓発するためには、「民主主義」の原則としての個々人の「個性の尊重」と他者の「権利の尊重」の「実践」が必要である。「道義的教育」は、この上に成り立つのである。[16]

もちろん、「人格の陶冶」と「民主主義の実現」は、個々人の道徳と意識の成熟があってから可能なのであろう。

Hosei University Repository

白樂濬が、教育理念の基礎として主張した「弘益人間（Maximum Service to Humanity）」の内部には、道徳性の涵養を通して社会に奉仕する人間という意味が込められている。

民主主義の基本的精神を有効にするため、人間としての完全な人格を発揮できる資質を備え、他者および社会福利に貢献できる人材を養成しようとするのが「弘益人間」理念が有する意味である。[17]

道徳的・奉仕的な人間像を目指していた白樂濬の教育理念は、単純に政治的な意味での民主主義の実現以上に、個人の「人格」そのものを前提とする「普遍的個人」を意味するのである。個人の「道徳性」から出発して、社会への「奉仕」を「実践」することを強調した彼の教育観および思想は、南原繁の思想の出発点とも共通するところが多いと考えられる。これには、二人が生きた時代状況と宗教観などが関連していると思われる。

この二人にとって「戦後」という舞台は、学問と思想を通して国家を再生し、教育制度改革などを通して新たな戦後体制を構築、実現しようとした「挑戦の場」でもあった。彼らが生きた近代から現代までの時間を振り返って、その業績と思想を評価することは、これから後の世代にも彼らが遺した「道義」精神を伝えていくことでもあるといえよう。

Ⅱ　思想的理解としての「教育観」分析の選択

これまでは「思想史」、或いはある人物の「思想」について論議する場合、概念的解釈だけにとどまることが多か

Hosei University Repository

ったと考えられる。「思想」そのものに対する論議と研究は夥しいが、そのような研究を通じて、実際に何を分析したいのかという「方向性」は必ずしも明らかではなかった。「思想」の隣接学問である歴史・社会・政治学的意味について論議する場合にも、論議対象となる人物の思想と理念の分析だけに固定されて来たと言っても過言ではないだろう。

白樂濬の思想が有する意味を探っていく方法論として、「教育観」を選んだ理由はここにある。彼は、近代以後の西欧文物・制度の輸入過程および植民地政策過程において失われつつあった「伝統」文化と意識の強調を通じて、戦後の教育が制度的規格化だけに流れるのを避けるための努力を続けた。同時に彼は、「一人の人間の『人格的成熟』は、家庭と社会文化的環境から形成される教育的背景が大きく作用する。制度的教育は、全体教育のなかで一つの部分にすぎない[18]」と主張し、「個別的な伝統（personal tradition）」を強調する家庭教育の重要性を指摘したのである。

白樂濬は、制度内部で行われる教育の問題点を指摘しつつ「制度的教育が一定基準の評価による結果、社会的保障をすることだけに傾いて、家庭および地域社会からの文化的・教育的影響を無視する傾向がある」と述べた上で、「制度的教育を受ける機会を統制し、一方では制度そのものに適応することを要求する教育内容の提供は、結果のみに対する保障に過ぎない、これは、制度中心の人間評価基準を社会に広げる結果となる」と指摘した。そして彼は、「人は、制度的教育が有する影響力と関係なく、『人格的成熟』を優先にした教育を受ける必要性がある[19]」と強調したのである。このような彼の判断は、植民地支配によって移植された「制度的教育」に対する警戒心によるものであったと考えられる。「教育」そのものが有する意義について、白樂濬は次のような意見を示している。

Hosei University Repository

The early European religious thinkers believed in one increasing purpose, which would ultimately lead to a certain end. This theological concept has been secularized by many European thinkers. Condorcet, for instance, believed in the ultimate perfectability of man. He regarded truth, freedom and equality as synonymous. He advanced the view that a victory of truth is a stop along the way to political freedom and equality. Further, the goal of human perfectability can only be realized step by step, through education.(20)

彼が強調した制度的教育と非制度的教育の相補的関係の原理とは、個人的次元から社会・国家的次元の教育方式を包括し、並行するものであった。ここでいう非制度的教育とは、儒教的倫理思想などの歴史的伝統を踏まえた、個人に施される家庭教育や社会教育などを指し示している。確かに、制度的教育と非制度的教育は常に共存しつつ相補的関係を持って機能してきたと思われる。表面的には、制度的教育が教育全体を先導するように見えるが、白樂濬の主張のように、非制度的教育の領域との均衡と調和、そして協調なしで制度的教育だけで政策的目的を達成させようとする場合、非制度的教育から反動を誘発するようになって、結果的には制度的教育の政策目的自体が実現不可能となる可能性もあると考えられる。

一九世紀末の近代化過程において、韓国では、イギリスやドイツ、アメリカなど欧米国家からの近代的教育制度を取り入れた高等教育機関の設立運動が加速化され、実際に大学の設立にまで至るようになった。

一九一〇年、日本による植民地化以後の教育官僚たちの多くは、このような高等教育機関による一連の教育活動に

Hosei University Repository

対して肯定的ではなかった。それは、欧米型の近代的教育理念が植民地に浸透することを危惧したことによるものであると推測できる。しかしながら、これが韓国における私学主導の制度的教育の基盤となったのであり、同時に、自主的な近代化の主導権が「私学」側にあった背景として認められるのである。このような教育活動を通した近代化への動きには、自由な民権の確立と自主的独立国家の建設が第一の目標として設定されていた。[21] このように、植民地化以来の歴史の中から発見できる試練克服への意思および教育における対応方式は、制度的学校教育の機能と共に非制度的教育の機能の必要性によって相互補完的に展開されて来たともいえよう。

一九一九年の三月二日、朝鮮半島全国で大規模に行われた「3.1抗日運動」以後から登場した「文化統治政策」に対抗する形で、安在鴻（アンジェホン）、李商在（イサンジェ）、權東鎭（クォンドンジン）などの「新幹会」に所属した知識人たちによって一九二七年まで展開された「非妥協的実力養成運動」[22]は、独立的な制度教育を確立させるための試みであったと考えられる。このように、近代的、かつ独立的な形態の制度の導入過程において「制度的教育」と「非制度的教育」は、その必要性の点からも相互補完的な関係にあった。[23] 近代化過程において、周辺強大国の利益関係から生じた文化的・政治的理念によって、それを受け入れざるを得なかった朝鮮半島の近代の歴史と社会・文化における現象について、「教育制度」の導入過程の流れの概略を通して探る考察方法は、白樂濬における思想の背景と契機を解明するために必ず必要な作業であろう。

一九世紀以来の思想について論議するためには、まず、このような歴史の流れから生じた文化現象としての制度教育の属性を把握し、これを白樂濬および同様な思想傾向を持つ人物たちの思想的脈絡に対比して整理していくことが優先的であると思われる。

Hosei University Repository

Ⅲ　啓蒙的思想としての社会進化論およびマルキシズムの展開

朝鮮半島における近代の歴史を形成する要素としては、制度教育および非制度教育などを区別する背景となる幾つかの思想的流れが存在する。一例を挙げれば、「社会進化論」の影響を受けた「啓蒙主義的思想」、そして、一九二〇年代から日本が実施した「文化統治」時期の産物として登場したと知られている「妥協的自治運動派」の文化・学術運動における思想的な流れがその一つである。一九世紀以来、啓蒙主義的思想の流れは、今日までも社会エリート層および統治者の論理として、社会全体に重大な影響を与え続けている。白樂濬、安昌浩（アンチャンホ）によって主唱された「実力養成論」、また、李光殊（イクァンス）によって主唱された「民族改造論」などは、以後、愛国啓蒙運動、文盲退治運動などを含む「社会進化論」的な発想に制度教育の基盤を置く契機として働く原因となった。このような発想は、韓国において一九六〇年代以後から続いてきた「開発軍事独裁政権」によって「祖国近代化」というスローガンで加速化したと考えられる。制度教育内においてはもちろんのこと、非制度教育に属する各種の社会運動および社会教育的領域においても、終始「国民啓蒙」と「社会進化」という目的が強調されるようになった。[24] しかし、「啓蒙主義」的教育運動が実際に人々を啓蒙したというよりは、植民地時代から社会全体に根深く存在して来た国民的「劣等感」だけを増幅させたという評価から逃れることは難しいであろう。特に、「社会進化論」的な発想は、社会における進化と発展の過程を単純な漸進的形態として把握し過ぎたため、邪悪で不正な支配権力を受容・幇助し、多数の社会構成員たちを操作したと見られる。

「社会進化論」と共に、韓国の近・現代史に大きく影響を与えた思想が「マルキシズム」である。階級闘争を通した社会革命を志向した「マルキシズム」は、一九二〇年代以降繰り広げられてきた各種の社会運動と社会闘争の主な

Hosei University Repository

るイデオロギーとして、その影響力を深化、拡大させてきた。これは、特に、植民地から解放された直後の左・右翼の間の理念対立過程においてはもちろん、制度教育の方向を決めるための思想的な影響力を発揮した。社会革命イデオロギーを基礎とする理念論争は、やはり植民地から解放された以後からであると考えられる。しかし、階級闘争の理論と社会革命イデオロギーは、戦後、既存の体制の急激なる崩壊とも重なり、階級間の憎悪と白黒論理の標榜による冷戦構図の固着化という副作用を生み出したことも事実である。彼は、マルクス主義における階級概念について次のような実例をあげて説明を行った。

While we deal with the problem of the objectivity of progress, we should not leave out the Marxians view. According to Marx, progress is the result of crisis and revolution between classes, and the objectivity of progress is the attainment of a classless society under proletarian dictatorship.

But, there is much evidence in world history that contradicts this theory of class consciousness. The energetic struggle put up in the last half centry by our colleagues from anti-bolsheviks bloc nations and the recent uprising of the Croatian people in Tito's Yugoslavia are outstanding examples. Theirs was an unconquerable courage based on nationalism and the desire for freedom of their people. It was not by any means due to their class consciousness. We have yet to see a class of people who would stand, together with fellow Marxians adherents against their own people while living under the environment of complete freedom.(25)

Hosei University Repository

上記のような「社会進化論」と「マルキシズム」は、近代以後の韓国社会だけではなく、世界中において精神史的な方向性を左右してきたと考えられる。このような観点から判断を加えた場合、「社会進化論」と「マルキシズム」は、韓国社会外部からの影響による「外発的」要素を多く持っているであろう。これに対比する形態の韓国社会内部から生まれてきた「内発的」思想の展開としては、どのようなものが存在するのか。以上のような点に相応しい人物として、ここで白樂濬と崔鉉培（チェヒョンベ）、二人の知識人における思想的傾向に着目し考察してみる必要性があろう。

Ⅳ　白樂濬と崔鉉培（チェヒョンベ）、二人の知識人における学問的背景

韓国における近代の歴史を精神思想史的に眺望したとき、代表的な知識人として評価されている人物としては、白樂濬（一八九五―一九八五）と崔鉉培（チェヒョンベ）（一八九四―一九七〇）の二人を挙げることができる。

白樂濬と崔鉉培は、ともに一九世紀末に生まれ、少年期に朝鮮王朝と大韓帝国の没落を経験した。そして、日本による植民地体制および制度が導入され、拡大・強化されて行った時期、また植民地から解放直後のアメリカによる統治と政治的混乱、さらに軍事独裁政権期へ至るまでの熾烈で過酷な時期を経験した。このような歴史的背景に基づき、白樂濬はアメリカ留学で学業を続けて、西欧の歴史学と宗教学、政治学、教育学などの学問研究に専念したのである。一方、崔鉉培の場合、日本留学経験を通してハングル、朝鮮歴史など、祖国に関連した学問研究に没頭するようになった。彼は、自らの論文『朝鮮民族更生の道』（一九三〇年）の中で、「民族固有の文化の産物である『ハングル』の持続的な研究およびその教育こそが『朝鮮民族更生の道』である」[26]と主張している。

Hosei University Repository

彼ら二人は、近代以後、朝鮮半島の制度および思想の受容にあたって最も重要な影響を与えた二つの国、「アメリカ」と「日本」を経験したことによって自らの学問研究における「多様性」を備えることになったと考えられる。この学問的な「多様性」が有する共通点と共に、「自主的な国」の建設を目指すために自ら習得した「学問」を道具として使おうとした二人の思想における「方向性」も共通する箇所であろう。

一生を通して教育界への奉仕に献身した二人は、「実用的学問」を目指していた。崔鉉培は、ハングル研究を通して伝統文化と精神に関わって民族的「主体性」を前提とした上での学問的実用性を強調した。[27] 白樂濬の場合、延禧大学の文科の同僚であった崔鉉培と同様に「伝統文化」の保全を前提とすると共に、学生たちに、西欧の文献耽読のための基礎的道具としての「外国語の習得」など、現実的な「有効性」とその実践を強調したのである。崔鉉培においては「主体性」の方を重視し、白樂濬は「実践性」の方をより重視したという点は対比できるが、何れもプラグマティズムに帰結すると考えられる。

特に白樂濬は、内発的で主体的な精神を前提とした「人類共存の実現」という理想志向的論理を自らの教育理念として表明したのである。内発的・主体的論理に従い教育的理想を樹立させ、その実践を強調したところは、白樂濬と崔鉉培の共通点でもあろう。白樂濬は、自らが志向していた理想的信念を「弘益人間」理念の基盤にしつつ、その実現のためにプラグマティズムを最も望ましい学問的方法論として設定した。彼は、その「方法論」の実践において、単なる直載的な実践ではなく他人との「調和と均衡」を求めたのである。韓国の近・現代におけるイデオロギーを支配してきた弁証法的進化論の思考方法にとどまらず、これに「調和的価値観」を加えた学問を主なる方法論として追求した[28]というところは、白樂濬における「学問的実践」が持つ最も重要な意味といえるだろう。

Hosei University Repository

彼は、「価値概念とは、相異なる対立的優先順位によって決まるものではなく調和と均衡の関係の中で生まれるものである」と主張しつつ、「理想と現実の距離が遠くなればなるほど価値判断における『調和』と『均衡』の秩序という原則を追求すべきであり、究極的には『調和』と『均衡』の秩序が維持できる状態へ進むための『合意の導出』が必要である」[29]と語った。確かに、「均衡」と「調和」の当為的な必要性は、歴史的な状況の変化により多様な形態で表出してきたと思われる。白樂濬が語ったように、これに対する「補完的な機能」としての「伝統文化の重視」と「教育制度の運用」は、相互的均衡関係であると説明できるのであろう。これは、彼が言及した「内発的」動機と「外発的」動機の相互補完的関係の目指すところであったと考えられる。

彼は自らの著書『大学と教育』で「伝統文化」と「大学教育」役割との関係について次のように語っている。

> The systemization of the attainments of the past has been a general feature of education, especially in countries where the ancient culture has left a rich heritage.
>
> The present derection of modern education is not retrospective, but rather forward and upward looking. Neverthless, in order to retain our national identity, we can not detach ourselves from our past.
>
> All that is valuable in traditional knowledge should be preserved, revived and eventually integrated into the rising corpus of knowledge. The university should be not only the guardian of traditional values but also the positive syncretizer of the old and new for the fulfillment of the mission of conservation and discovery.

Hosei University Repository

University education has to reckon with modern technological development. It has become so important in the life of man that it should take a similar position in the educational programs of institutions of higher learning, especially in vocational education.

Despite the inevitable criticisms about specialization and compartmentalization, technological studies will grow in university education and in the national programs on industrialization. The university will not be worthy of the title without a branch or branches in technology.(30)

一八世紀以後、朝鮮半島における「実学志向派」学者たちの共通なる特徴は、平等思想に基づいた教育機会の均等と科挙制度の廃止であった。ここには、能力中心の人材登用と実学および科学技術の強調、新学問の積極的な受容を志向した彼らの狙いがあったからであろう。かつ、当時のこのような動きは伝統的社会と文化が生み出した教育体系に対する対立的思潮であったと評価することができる。

しかし、彼らの革新的な発想は、当時の社会と政治を実際に改革できる程の影響力を与えることはできなかった。彼ら「実学志向派」学者たちの「革新的」思想の限界点としては、それを実践できる適切な方法論を見つけることに失敗したことに原因があると考えられる。一八世紀の朝鮮社会における実学者たちの思想は、朱子学的伝統に抗する対立的な思潮として生まれたのであるが、一九世紀の後半の一八七〇年代から始まった近代化からの弾みを受けて、再び歴史の表面に浮上するようになった。ただし、当時の近代的教育が持つ理想が現実化するには、様々な難問が散在していた。白樂濬は、過去の実学者たちの思想的志向点を正確に把握し、学問に内在する「実用性」を導出、これ

Hosei University Repository

に基づいた革新的意志を現代において適用した上に実践した先導的人物、として評価することができると思われる。

白樂濬が、植民地から解放された後の韓国における教育理念として提案した「弘益人間（Maximum Service to Humanity）」の理念の中には、「人本主義」と共に学問的「実用性」が最も主なる概念として確立されている。彼が主張した「実質的な『個人』として自立的な存在になれる教育」とは、「人間本位的な実用理念」に基づいた価値観によって可能となるのであろう。しかし、彼が主張した「人間」という理念が、個々に存在する人間を越えて、より連帯する存在という概念を強調していたとしたら、今日の「人間第一主義」的価値観による行き過ぎた個人主義ともいうべき副作用を最小化することができたと思われる。

但し、白樂濬における教育理念が持つ意味とは、エリート中心の上からの「啓蒙教育」だけにとどまらず、大衆自らの意志と必要性による教育の契機を与えたところにある。それと同時に、植民地時代に導入された制度教育の見直しによる漸次的改良と発展を共に企てたところにあると考えられる。白樂濬における教育理念の評価は、近代以後、韓国と日本において展開された時代を理解するための先行研究として必要であり、同時に今日における新たな日韓関係を模索し構想するために妥当な研究であるといえよう。

第二節　大学における教育体系の変動

Ⅰ　制度教育の導入過程における試練期

植民地から解放された後、多くの韓国国民が望んでいたことは国家および社会の新たな建設と民主的政治の実施、経済的な変動によって大きく変化した農・工業環境への適応、そして植民地からの解放後にも、続いて迎えざるを得

Hosei University Repository

なかった朝鮮戦争の影響による精神的・物質的な破壊状況からの脱皮だったと考えられる。このような状況からの国家・社会的再建を現実化するために白樂濬は、国家の理想を受容できる人材を育てるために「人格教育」を行うことを強調した。彼は、「人格教育」の理念は精神的な破壊状況からの再建のために必要なものと確信しつつ、物質的な破壊状況を克服するために強調したものは「技術教育」であった。

今まで、「文」だけに傾いていた我が民族の傾向もこれからは矯正され、個人としての自活力を強化する必要がある。これによって、国民経済の再建に関心を持ち、それぞれが「一人」としての役割を果たす必要があろう。以上の人格・技術教育は後の世代を「自由人」として育てるためには必ず必要な学習内容である。[31]

一方、白樂濬は、朝鮮戦争中にも「戦時下教育特別措置」、「大学教育による戦時特別措置」を実施し、プサン・チョンジュなどの地域に戦時連合大学を建てることにも大きく貢献した。そして、この戦争が終わる前の一九五二年春から、この「戦時連合大学」を母体として各地方にも次々と国公立大学が設置されることとなる。これは、大学のソウル集中による問題点を解決し、地方文化の育成・発展と共に地域社会を活性化することにその目的があった。[32] これは「戦時中にも教育だけは中止できない」[33]といった彼の信念と戦時連合大学の経験を生かした結果でもあろう。

これで一九五二年から、全羅南道（ジョンラナムド）、全羅北道（ジョンラブクド）、慶尚南道（キョンサンナムド）、慶尚北道（キョンサンブクド）などにそれぞれ一つずつ四つの国立大学が誕生することになった。[34] これらの地方国立大学は、国家の予算で運営されるという所を除けば、地域住民による財政的な寄付などの方法で土地を購入し、建物を建築できる運営体制を採択した。[35] また、その地域社会の固有の文化などを

Hosei University Repository

研究し、地域産業への寄与と発展を主導することを目指す点では、アメリカの州立大学とも多くの共通点を有すると思われる。

白樂濬は、戦後韓国の大学教育における「自主性」「専門性」「政治的中立性」を目指し、究極的には教育における「民主主義」を実現するとともに国民教育のより効率的運営のための制度的基盤を作り上げた人物であった。[36]

Ⅱ　植民地解放後の韓国における教育自治制度の導入

植民地から解放された韓国の教育自治制度における出発点は、連合軍司令部（GHQ, General Headquarters）によって設置された在朝鮮アメリカ司令部軍政庁（USAMGK, United States Army Military Government in Korea）の統治を受けていた一九四八年頃の時期までさかのぼる必要がある。[37] その頃、韓国の学者の間では「文教部が独自的に米軍司令部側に建議し、教育自治制度に関する法令の提議を加速化させよ」[38]という内容の論議が行われていた。

そのようにして、一九四八年八月一二日には法令第２１７号「教育区会設置法令」と法令第２１８号「公立学校財政経営法令」を公布、同年の九月一日から実施できるようになった。二つの法令に署名した当時の軍政長官ディーン（W. F. Dean）は、「ここに韓国国民へのプレゼントを一つ差し上げる」[39]という言葉を残したと言われている。

白樂濬は、文教部の長官として、教育自治制の展開過程においてこの当時の一般的認識とは相異する教育民主化論理を展開した。

「教育自治制」は我々の伝統理念とも密接に関連している。それは、高麗王朝時代における実学の理念である

Hosei University Repository

「齎」の概念、また朝鮮時代における実学の理念である「學契」の概念などが現代化された語彙に過ぎないのである。[40]

彼は「教育自治制」の実現こそが、「民主的国家」の実現に通ずるとした自らの教育理念における究極的理想を「実践」するための出発点と思っていたのであろう。

「民主的国家」とは、国民によって運営される体制であるように、これからわが国は自治制度を本格的に実施することによって、その「民主的国家」への第一歩を踏むこととなろう。その中でも、「教育の自治」こそが、全ての事業の中で最も重要なものであろう。[41]

しかも彼は、「教育自治制」の実施が招来する恐れのある問題点について指摘することも同時に忘れなかった。数十年前に彼が残した指摘は、今日の状況を理解する上でも参考にできると思われるので、下記に引用することとしよう。

肯定的理念から出発したこの制度も、その実施においては真剣に考えて置くべきことが存在する。それは、それぞれの教育委員会選挙において政治的野望を持った者による道具化の防止、各教育委員会とその監督者の権限を正確に明記した上で、各学校の内部的問題に対する干渉の防止、そして頻繁な会議、煩雑な事務などによる人

Hosei University Repository

件費の無駄な使用を抑えることである。[42]

白樂濬が文教部長官として在任していた時期（一九五〇―一九五二）は、朝鮮戦争（一九五〇―一九五三）の勃発によって、様々な現実的障害が散在していた。彼は、このような危機的状況において「中断なき教育の継続」を表明して、植民地解放後の韓国社会と教育の新たな発展を試みたのである。この時、彼は、教育行政への参加を通して、数多くの業績を残した。

なお、白樂濬は、教育行為と教育行政における具体的な目標の確立を呼びかけた。これは、若き世代の大学人たちが「自由人としての国民、自活的な個人、平和的な国際人」[43]としての役割を果たすことができるように呼びかけたものである。彼は、教育行政の業務を中心として、究極的には、このような目標の達成のために努力したのである。それでは、「自由人としての国民、自活的な個人、平和的な国際人」とは、具体的にどのようなものであろうか。

まず、一つ目の「自由人としての国民」とは、人間としての価値を最高と認めた上に人間としての尊厳性を自覚し、人間としての幸福を営為するための存在としての国民を意味するのである。ここでの「自由」とは、政治的・言論的・経済的・宗教的な自由を意味すると共に、それを脅かす状況に対して、反対意志を行使し自由を享有できる自由[44]を意味するのである。二つ目の「自活的な個人」とは、個人としての自立能力を培養して人格的、かつ経済的自立ができる個人の完成を意味している。白樂濬自身が深く関与した韓国の教育法の第1条が、「教育とは『弘益人間』の理念の下、全ての国民が人格を完成し自主的生活能力かつ公民としての資質を共有できるようにすると同時に、国家発展のために奉仕し、人類共栄の理想実現に寄与することをその目的とする」と明示しているように、「自活的な個

Hosei University Repository

人」を完成させることは、大学人たちを「自由な国民」と「平和的な国際人」に育てるための前提であると考えられる。そして、三つ目の「平和的な国際人」とは、民主主義思想を基礎として、人類社会が共に望んでいる「世界平和」のために努力を注げる人材を意味する。このためには、時代が必要とする「すべての人間の文化的努力」が必要であると彼は主張したのである。[45] 他にも、このような理念の実現のために白樂濬は、「人格・道義の培養」と「技術の習得」を強調した。

理想的教育理念の実現と戦後の社会再建を同時に成就するための教育行政における彼の努力は、時代的変動に翻弄されない統一国家の完成と民主主義体制の受容、朝鮮戦争中の精神的・物質的破壊を克服するための努力でもあった。以後、延世大学の総長になった彼は、一九六八年六月に開かれた「世界大学総長連合会」に参加して次のような講演を行った。

Higher education should have a very significant place in the realization of national purpose for any given country. Toward that end people are united and national resources dedicated. The state is a political organization, while the people are a cultural entity.

I do not refer to the narrow nationalism which has reeked such terrible havoc on the world in the past generation. Rather, I refer to our loyalty to the country of which we are responsible citizens.

In a vertical society, the sovereign or select group guides the destiny of the people. However, today and to a greater degree in the future, in this new horizontal society, intelligent and responsible citizens de-

Hosei University Repository

cide their fate.

This will mean the training of people in the ideals and purposes to which the nation and the people have been committed. I have illustrated, as I understand them, the national objectives of Korea.

The realization of a national purpose especially for those countries in the so called third world, must come through constructive efforts. We must build our nation for the attainment of internal stability if we wish to join other nations on the international stage, merging diversity into harmonics whole.

Divisive influences, such as narrow loyalties to clan local prejudice and exclusively of generations must be transformed into cooperative bonds, and community loyalty and ultimately national unity.

In the responsible society which we aim to establish, self-interest and limited loyalties undermine all community welfare. It is this upsurge of idealism can stem the rot, and clear over collective vision. The university is called upon to plant high ideals in the minds and hearts of today's youth.

It is this upsurge of idealism that can stem the rot.(46)

Ⅲ 「伝統文化」に対する愛着——「実学」を通した「文化」の実践

白樂濬は、人間の知識と知恵によって発展していく結果物を「文明」と判断して、その精神的要素となるものが「文化」であると認識していた。さらにこの「文明」と「文化」は、区別できるものではなく、精神的・物質的な相互関係を持って構成されるものであると判断していた。「実学」を追求するには、自らの思想と学問を中心として西

Hosei University Repository

欧の学問を応用する部分的文化採用論が前提であるが、結果的に、朝鮮後期の近代期と植民地からの解放の時期、いずれの時代にも自らの主体性を諦めるところまで来るようになったと指摘した。彼は、朝鮮半島における伝統認識とその属性に対する自らの判断について次のように整理した。

So is every individual and nation. Most nations possess certain object factors which distinguish them other nations. Common descent, language, history, culture, customs, tradition and ideals are some of those factors. In Korea especially, people find their identity in and take great pride in their commonalities.(47)

彼は、自らの思想と学問を高めるためには、新たなものに対する「盲目的追求」ではなく、自らの思想と学問の方向および目標を設定しなければならない(48)と強調した。彼は、「長い時間をかけて作り出した『文化的伝統』を後世に伝えて、皆が『情緒的安定感』を持って生活を営為出来るよう」にすることこそが「弘益人間」理念が志向する指標であると述べた。

このように「文化的伝統」に対する認識は、以後、彼が主張した「教育の中立」にも関わっていると考えられる。「自由な思想に基づいた創意的な学問と技術で『文化』の樹立、且つ人類社会に貢献できるように努力する」(49)ために、時代的・政治的流れに教育が干渉されないよう「教育の中立」を訴えた背景には、彼の「文化」に対する認識が大きく作用していたと思われる。彼は、時代的・政治的介入から自由でない限り、文化の向上は不可能であると判断して

Hosei University Repository

いた。「教育」と「文化」の有機性に対する彼のこのような観点の中には、植民地知識人としての経験を持つ白樂濬自身の経験が大きく作用していたからではないだろうか。白樂濬は、文化的革新と受容について次のように自らの意見を示した。

> In the processes of transformation of the Korean, all the harmless and inconsequential customs of the land should be left intact, and attempts should be directed to reach down to some underlying moral and fundamental principle and began a transformation from within, working outward by giving them the secret of Western culture for her evolution into a new civilization all the culture of the West, but expressed in terms of Oriental life and habit.[50]

そして彼は、「固有の文化」で人類社会に貢献することが独立国としての機能的目的であるとするなら、固有の文化を継承できる人材を養成することは我々の責任であり、任務であり、特権であると語った[51]。ここで白樂濬が言った「固有の文化を継承できる人材を養成する教育」とは当然ながら「伝統文化を伝授できる教育」を意味する。彼は、個々人における「文化的価値」を社会的変化に適合させて発揮できる媒介物として「教育」という方法論を選択した[52]のである。

白樂濬における教育理念は、国務委員として文教部長官に在任していた時期に該当する朝鮮戦争勃発に合わせてより具体化されることとなる。このような危機的な時代状況を克服できる内在的原動力を増加させるための教育方針を

Hosei University Repository

立てることによって、彼は、「人権」を中心とする世界的平和人を育てる教育行政を目指した。[53] これをより具体的に実現するためには、現実に直面した危機に対する歴史文化的理解が必要であると判断し、且つ、世界史における現実の状況の位置を正確に把握することが必要と判断したのである。

彼は、「一六〇〇年前、中国から仏教を受容した時にも、我々の文化的『価値』と『様式』に基づいて受け入れた上に他の国と地域へ伝播したのである。儒教もこれと同様な方法で受容し、伝播した。……『弘益人間』の理念を今日の韓国における教育理念の基礎に決めたことは、自らの文化的『価値』と『様式』を昇華させて、世界の人々の利益のために『奉仕』し、人類社会に『貢献』できる人材の育成という世界共通的価値に符合するからである」[54] と自らの教育理念が有する歴史的背景と意味について説明している。このように彼は、自らが一貫して追求してきた『世界文化の主体的受容』とその理念の実践のために、現実における危機的状況を克服するための努力をしていたと考えられる。彼の教育理念は、近代以後の「西欧文化および文物」の単純な「受容」にとどまらず、自らの文化的背景を通して「受容」して「還元」することで成り立つ「文化の世界化」に対する試みであったと思われる。

彼は、自らの教育理念が目指していたもう一つの目標である「実学的な実践の態度」と関連して次のように語っている。

（朝鮮の）「実学」における思想の中で、最も主なるものが「東学」が目指していた「国政改革思想」である。同時に「実学」勃興は、当時の社会に新しい原動力を提供した文化復興運動であった。李瀷（イイク）（一六八一―一七六三）、丁若鏞（ジョンヤクヨン）（一七六二―一八三六）のような実学者たちによる「自我意識」の強調は、氏族社会における共同的自己

Hosei University Repository

責任意識と関連している「匹夫有責」の概念に由来するが、実学者たちは「救国済民」の方略を積極的に模索し、且つ時代的現実を克服できるように指摘したのである。……実学者たちの共通の思想は、合理主義であり、時代的非合理性への指摘だけにとどまってはいない。彼らは、個人の「自我成就」に相応しいものは、積極的に受け入れて学ぶことが大事であると主張した。このような彼らの主張は、今日の民主的市民意識のもとになる思想であろう。

このように、彼が歴史における「実学思想」を自らの教育思想に適応して実践して来たのは、実学における「合理主義」的精神と共に、その基であった民族の「文化復興」への意志と意識に共感したためであった。彼は、歴史における李瀷（イイク）（一六八一―一七六三）と丁若鏞（ジョンヤックヨン）（一七六二―一八三六）の精神を「実学思想」の結果物として集約、実践することによって、伝統的な文化と学問が有する価値と機能の現代的「拡大再現」を実現するためであったと考えられる。

特に彼は、丁若鏞が主張した「法古創新」の思想を強調した。彼は、過去の歴史を正しく理解した上に新しいものを創出するという「法古」の精神が「伝統」を継承するための理想主義的理念であって、「創新」とは、新たな革新を組成する進歩的理念であると解釈した。実際に丁若鏞は、過去のものだけを踏襲すると模倣に流れる可能性があって、新しいものを創出するばかりでは系統を確立しにくいと説明した。白樂濬は、自らの一連の教育理念の実現の過程において、この「法古創新」の精神を簡潔に適用し、受容したと思われる。[55] 李瀷も「依古而變通」の思想を主唱して、伝統的なものの継承の重要性を主張しつつ、その伝統的なものに内在する病弊を清算しなければならないと強調した。白樂濬はこれを「伝統的なもの」であっても全てが継承すべき価値を持つものではなく、共通の価値観と利益

Hosei University Repository

に反しない要素を選別して継承する時に、その文化の主体性と独立性が保障できると解釈した。[56] このように白樂濬は、「伝統文化」に基づいて「実学」の精神のような新しくて価値のある「新文化」の追求を強調したのである。彼は自らの思想的な基盤と方向を、「伝統文化」の中から求めようとした積極的な意志を示したのである。

Ⅳ　知識水準の向上による文化認識の実践――朝鮮文庫および延世大学国学研究院の設置

白樂濬は、たとえ自らの「伝統文化」が高い水準を持ち、学問的な研究実績が残されているとしてもこれを実際の生活において応用して活用しなければ、その価値は半減すると認識していた。彼は、「高き理想と崇高な人格を備た時、『真』『善』『美』、そして『義』を判断できる個人になれる」[57] と述べた。誰もが「学問」と「徳行」を高めることによって自己発展と文化発展に共に寄与することができると述べつつ、「学問」と「徳行」の世界は無限であり、且つ、その実践的方法論も無限であると主張した。彼は、「徳行」を前提にした学問活動の目的について次のように述べた。

> There are many who consider learning an expedient to living, and indeed the objective of learning can be the stimulation of thought or the promotion of theories, but it is more important to engage in it as necessary for the formation of character. Moreover it is to acquire the knowledge, intellectual ability, and skill to improve the lot of others.
>
> While it benefits me, it also enables me to benefit humankind of which I am a part. Why study? Put sim-

Hosei University Repository

ply, to develop character, to become excellent human beings, to serve humanity, and to make the world in which we live a little better than it was before we found it.[58]

ここで彼は、それぞれの人々が、知的能力と人格を「向上」させることは、個人における知的能力と人格の「向上」だけにとどまらず、全ての文化的価値を達成するための「方法論」であると強調したのである。[59] そして彼は、知的能力の向上のため、伝統文化の研究をその目的とする財団法人「朝鮮文庫」の創設を提案した上で、具体的に (1)文庫の名称は「朝鮮文庫」とする (2)本文庫は朝鮮文化の研究をその目的とする (3)本文庫は上記の目的を達成するため、史学・文学・語学・民俗学に関する収集、研究費の補助、研究発表の活性化、講演会の開催、文化研究所・博物館・図書館の運営などの必要な事業を行う (4)本文庫の維持のため、財団法人「朝鮮文庫」を組織する (5)本文庫の事業経営は財団法人理事会にて執行する などをその内容とする方案を提示した。彼は、某日刊紙を通して「我々には体系的研究を必要とする古き文化的伝統があり、それに精進してくれる人材がいる。学内外の人材たちよ、『朝鮮文庫』設立に共に参加せよ」[60]と呼びかけた。同時に彼は、このような事業の理想を実現するため、綿密な計画と円滑な組織、そして献身的な責任者が必要であると訴えた。

「朝鮮文庫」の設置の理由としては、朝鮮半島における文化建設の基礎を立て、伝統文化の地位を向上させることにより世界的な位置を確保し、且つ、現代における生活と文化の発展のため世界的流れを理解して、それに対応できる新文化の基礎を確立することであると述べた。[61] そのためには、古き伝統文化の研究を専門とする中核的拠点機関を設置することが必要であると主張したのである。

Hosei University Repository

白樂濬は、植民地時代の厳しい状況の中でも、朝鮮の学者だけで構成された「友愛会」を結成し、朝鮮の歴史・言語・文学などをテーマとする論文を公募することによって、自らのアイデンティティーについて積極的に研究できる機会を与えた。これは、朝鮮における唯一の高等教育機関として機能していた延禧大学が誇る学風であると同時に、「伝統文化」研究に対する彼の意欲と意味がどこにあったかを表徴することであったと思われる。彼は、それぞれ朝鮮の言語と伝統民俗の研究のために「朝鮮語学会」、「民俗学会」、そして朝鮮半島と周辺の国と地域の研究のために「震檀学会」を設立した発起人としても知られている。しかし、朝鮮の文化を研究して、その資料を調査・整理するための試みは、当時の朝鮮総督府によって弾圧を受ける原因ともなった。[62] このように始まった学問と文化の復興のための試みは、国文学、歴史学の復興を通して延禧大学を民族中興の学問的中心にするために、関連研究を行う専門的機関として国学研究院を設置すると共に、理工系学部の重点的育成などを学問復興のための実践的方法論として採択した。[63] 彼は、若い学者たちが中心となり、「国学（Koreanology）」の研究を通して新しい学問的方法論を創造し、且つ、科学的方法でその体系化を果たすことによって、新しい文化の暢達に寄与することを促したのである。

彼は、個々人における伝統文化への認識と関心の高調を通して、「伝統文化」の再生と文化理念の再設定において主体的認識と現代的変容を共に追求してきたと考えられる。このために彼は、伝統文化に対する真なる価値について学問的に研究するための基盤を作ったと思われる。特に、国学（Koreanology）研究に対する支援と態度の刷新は、伝統文化の本質を「学問」という道具を採用して拡大させようとした彼の意思であった。その結果、学問を通した伝統文化に対する位置づけが確立するよう寄与できたのであろう。教育と文化の領域における近代化を実現するために、教育行政にも直接関与して、その実践のため努力したことは本当の意味での「プラグマティズム」の実現であったと

Hosei University Repository

考えられる。彼が見せてくれた一連の活動は、植民地時代から学問と大学を媒介に行われてきた。これは、今日における大学教育の精神的理念と文化的価値として継承されていると思われる。

第三節　言論復興と白樂濬

I　国民思想研究所と雑誌『思想界』――鄭寅普（ジョンインボ）の「陽明学演論」掲載

白樂濬は、朝鮮戦争期間中、戦争で疲弊した人々へ思想的な活力を与えるために「国民思想研究院」を設立した。この研究院の機関紙として創刊したのが『思想』誌であった。国民思想研究院は政府傘下の機関であったが、機関紙『思想』誌の編集は民間人が担当するようにして、この『思想』誌の編集長に任命した人物がジャーナリスト張俊河（ジャンジュンハ）[64]（一九一八―一九七五）であった。以後、張俊河によって雑誌の名前は『思想界』と変えられ、民間主導の雑誌として再発行されるようになる。[65] この時、白樂濬は張俊河に一九三〇年に書かれた鄭寅普（ジョンインボ）の「陽明学演論」を掲載することを薦めたのである。

「陽明学演論」の執筆者である鄭寅普は、植民地時代に同じ大学の同僚教員として学問的・人間的に親しい関係であった。白樂濬は「自らに実学と国学を振興させようとした意志を与えてくれたことは、鄭寅普先生の知識と協力のおかげである」[66]と振り返っている。当時、彼は、世界史において民族固有の理念を基盤として「文化的発展」を果たすことを学問の目標と設定していた。白樂濬は、実学理念である「実事求是」の思想を発展させて、実践すれば民族の繁栄に繋がると判断していた。彼は自らが国務委員文教部長官と延世大学の総長として在職していた期間の間にも、近代化（Modernization）の基礎理念を実学思想に基づいて求めるべきであると主張した。まだ、彼は「鄭寅普

Hosei University Repository

先生は、陽明学の主なる『知行一致（知行合一）』の思想を強調しつつ、実学思想と一致するところが多いと説明した。これを通して『実心問学』の思想を学生たちに強調した[67]」と述べている。そして、「鄭先生が人間に内在する『空虚』と『邪匿』を捨てるように述べたところは、私が追求してきたキリスト教思想とも渾然と一致したのである。我々は実学の精神である『法古創新』の現実化の必要性について意見を一致した[68]」と振り返った。このように白樂濬は、鄭寅普の学問的創意力と精神力を評価しつつ、その品格は「学者」の姿そのものであると激賞した。彼は、鄭寅普の「陽明学演論」が、中国において朱子学に対抗する形で誕生した陽明学に関する研究だけにとどまらず、朝鮮学問の活性化と民族の独立を目指すことを目的としていたと評価した[69]。このような背景を持って、彼は雑誌『思想界』に鄭寅普の「陽明学演論」を掲載するように推薦したのである。張俊河は、鄭寅普の「陽明学演論」に対して「実学分野における我が民族の精神史を網羅した文書として今日の我々に知的刺激を与えてくれる宝[70]」と評価した。このことにより、一九三三年九月八日から一二月一七日まで『東亜日報』に一部が掲載・削除されて以来、雑誌『思想界』を通して、やがて全文が掲載されることとなった。

以後、『思想界』社は、白樂濬の紹介で『震檀学報』、『教育文化』、『歴史学報』、『東方学誌』、『国語国文学』誌、『哲学』誌など幾つかの学術誌を朝鮮戦争が終結した一九五三年八月から次々と委託出版するようになった。『震檀学報』は、植民地時代の一九三四年五月に創立された学術団体「震檀学会」が創刊した学術誌だったが、その内容が問題となって一九四一年六月の第14巻を最後に発刊が中断された。植民地から解放された後、一九四七年五月の第15巻から復刊することとなったが、朝鮮戦争の勃発で再び中断されたのである。これを『思想界』が引き受けて、朝鮮戦争が終結した一九五三年八月から第17巻を発行することとなった。『教育文化』は、一九五三年八月に「韓国教育文

Hosei University Repository

化協会」の機関紙として創刊されて、一九五三年一二月から一九五六年一月まで『思想界』が委託発刊した雑誌であった。『歴史学報』は「国内歴史学の新しい建設」を目的として創刊されたが、朝鮮戦争期間中に中断されたものを『思想界』が引き受けて一九五三年八月から発行を担当することとなった。『東方学誌』は、現在の延世大学国学研究院の前身である延禧大学東方学研究所の機関誌であって、『国語国文学』誌と『哲学』誌は、それぞれが「国語国文学会」と「韓国哲学学会」機関誌として創刊されて、朝鮮戦争期間中に出版が中断されたものを『思想界』が引き受けて再発行することとなった。[71] 以上の雑誌の中で『教育文化』と『東方学誌』の発行人は白樂濬であった。

『思想界』の編集長であった張俊河と主幹の小説家の金聲翰（キムソンハン）は、「『震檀学報』『歴史学報』『東方学誌』など権威のある学術誌の出版が再開されて、少しでも国内の学術活性化の力になれたことを嬉しく思う」[72]と述べている。朝鮮戦争直後の厳しい状況の中で、学術雑誌の委託発刊は『思想界』の経営という限定された意味だけにとどまらず、植民地統治と朝鮮戦争によって中断されていた様々な分野の学問の再生のための役割を果たしたことにその大きな意味があると思われる。これは、厳しい現実に対して屈従しない知識人たちの姿でもあったのだろう。白樂濬は『思想界』が創刊された一九五四年四月から「3.1運動精神論、韓国の教育・科学・文化、朝鮮戦争と世界平和、韓国教育の当面課題、社会変動と民意、朝鮮半島をめぐる国際情勢、ハングル運動の方向、『革舊就新』の主唱」などをテーマで『思想界』誌面に論考を投稿した。韓国社会の現代史における雑誌『思想界』の位置としては、軍事独裁政権に対抗しつつ批判精神を発揮して、韓国の民主化に寄与し、且つ、雑誌ジャーナリズムを代表するまでに成長したのである。

白樂濬は一九五七年四月七日、韓国の「新聞編集人協会」の設立に関与すると同時に、言論界の記念日である「新聞の日」を決めることに尽力した人物であった。彼は、過去の植民地時代において、言論界が民族の自主的独立のた

Hosei University Repository

めに努力してきたことを高く評価しつつ、新聞・雑誌など、マスコミによる社会先導機能を強調した。彼は「新聞の日」制定記念式典の場で「新聞は、如何なる階級、あるいは権力にも傾いてはいけない。国語の使用が禁止されていた植民地時代にも、新聞は輿論を調整して社会を先導し、且つ様々な知識・学問的業績の記録、伝達を行ったのである。六一年にわたって行われてきたこのような社会的貢献の伝統をもとに、これより民主国家のために邁進することを望む[73]」と述べた。そして、彼は「学問の研究を専門とする知識人以外の一般の人々は、学校教育ではなく、新聞などのマスコミを通して知識を得る。このような意味で、マスコミは国民への知識普及を担当する明らかな『教育機関』であり、マスコミ関係者たちはその教育を担当する『教育者』である[74]」と述べつつ、マスコミにおける教育的機能を強調したのである。

彼は、初期のプロテスタント伝播の歴史的過程において「聖書」がその道具として広い範囲で使用された事実に着目して、マスコミの重要性を自覚したと考えられている[75]。彼は、植民地統治下の朝鮮半島においてマスコミが国民啓蒙と伝統文化の保全に全力を尽くしたことを高く評価して、植民地解放後から朝鮮戦争の終結までの歴史において長く中断されなければならなかった「学術誌」などの再発刊に自らが参加したのであろう。

Ⅱ　マスコミに対する白樂濬の認識に内在する思想的背景――梁啓超（一八七三―一九二九）らによる「変法自強運動」の影響から延世大学新聞科学研究所の設置に至るまで

白樂濬は、中国の思想家である康有爲（一八五八―一九二七）とその弟子梁啓超（一八七三―一九二九）における「変法自強運動」に影響を受けている。特に梁啓超の場合、近代的な新聞・雑誌などを利用して改革啓蒙運動を展開

Hosei University Repository

することによって、中国に本格的な言論の時代を開いた人物であった。[76] 彼は一八九五年に新聞『中外公報』を創刊した後、多様な種類の新聞と雑誌を発行して、自らの「変法自強運動」を拡大するための思想的道具として活用した。彼は、一八九八年の「戊戌政変」失敗後、日本に亡命し、横浜にて一八八九年の一一月から一九〇一年一月にかけて雑誌『清議報』、一九〇二年一月から一九〇七年一〇月にかけて雑誌『新民叢報』を発刊した。彼は、海外から本国の政権を非難する文書を発信することによってたくさんの読者を得て、中国国内の輿論にも影響を与えたのである。[77]

梁啓超の「変法自強運動」思想は、植民地統治期の間に朝鮮半島において展開された「愛国啓蒙運動」にも多くの影響を与えた。国権と自主権の回復を当面の課題として考えていた朝鮮の啓蒙思想家たちは、西欧における社会契約論と社会進化論のような近代思想を直接受容すると共に、中国における「変法自強運動」の論理を自らの「愛国啓蒙運動」に並行して適用しようと試みていた。梁啓超が日本の横浜で発行した雑誌『清議報』は、仁川（インチョン）を通して朝鮮に輸入、京城（キョンソン）・仁川などで発刊された。[78] 彼の代表的著書『飲氷室文集』は翻訳され、朝鮮の知識人たちも広く読めるところとなり、且つ一般の人々にも紹介されるようになったのである。[79] 梁啓超が中国に帰国したのは、中華民国が成立した一九一二年のことであった。白樂濬は、思想家梁啓超に対して「中国における啓蒙思想家・言論人であって、彼の思想は中国だけではなくて、わが国の若者たちにたくさんの影響を与えてくれた」と述べつつ、「彼は、心の恩師として思っている」[80]と振り返っている。また、白樂濬は、アメリカ留学中の一九二三年、フィラデルフィア（Philadelphia）で、独立協会の徐載弼（ソジェピル）（一八六八―一九五一）・安昌浩（アンチャンホ）（一八七八―一九三八）などと会って、朝鮮において啓蒙運動を広げることを協議したのである。

一九二七年、彼が留学を終えて帰国した頃には、『東亜日報』、『朝鮮日報』などによる様々な啓蒙運動が広がって

Hosei University Repository

いた時期であった。『東亜日報』は一九二八年から一九三四年までの期間中にロシアのヴナロード（Vnarod）運動に着目して「学生ヴナロード運動」を展開してハングル普及運動を広げた。白樂濬は、このように大学生たちによる一般人向けハングル講習以外に、知識人層の教師・学者などを対象にハングル講習・文法研究会を広げて、知識人層へのハングル普及に先導的な役割を果たしたのである。一九三一年と一九三二年には、「朝鮮語学会」の後援で崔鉉培（チェヒョンベ）などの国語学者による講習会を開催することによって、知識人層がハングルを正しく理解し学術用語などにも幅広く応用できるよう努力した。一九三三年には、「朝鮮語学会」によりまとめられた「ハングル文法統一案」を約二〇万部印刷して、国内だけではなく、満州・日本にも配布した[81]上に、言語使用における日本の「文化統治」政策を糾弾したのである。このように植民地時代に行われた国語・ハングル運動は、「独立のための原動力の培養」という巨大な目標を目指して展開されたものであり、国語の守護と普及において、マスコミの役割に対する白樂濬の期待に応える行動であったと考えられる。彼は、国語・ハングル普及運動を通して、伝統文化の体系的研究の必要性と共に国学（Koreanology）研究、そして言論学の体系的な教育の必要性を認識するようになった。これは、「震檀学会」と「延世大学東方学研究所（以後、国学研究院になる）」、そして「延世大学新聞科学研究所」を立ち上げることで現実化するようになったのである。

日本の植民地から解放された後、アメリカは朝鮮における「新聞・雑誌発行許可制」を撤廃し、「自由放任言論政策」を公表した。これによって多様な日刊新聞と週刊・月刊刊行物が発行されるようになった。植民地統治期間中、極めて抑圧されていた新聞・雑誌などの数は、植民地解放後、急激に膨張をし続けた。白樂濬はそこで働く言論人の需要を充当すると同時に、学問的にも体系化する必要性を感じたのである。このような時代的・社会的な動きを背景

Hosei University Repository

に設立されたのが「朝鮮新聞研究所」であった。「朝鮮新聞研究所」は、ジャーナリズムと言論人養成をその目的にして創立発起人大会を開き、延世大学「新聞科学研究所」という名前で正式に設立された。韓国においてマスコミ関係の研究所が大学内に設立されたのは、これが初めてであった。

「新聞科学研究所」は理事会を元に新聞と通信に対する学問的研究のために大学との連携を強めていった。その他にも報道、ラジオ、映画部門などについて調査・研究を並行して、当該部門の研究者および質の高い言論人の養成を目標に事業計画が立てられたのである。以後、「新聞科学研究所」は「新聞の日」の制定および新聞展覧会を開催するなどの計画を掲げると共に、「新聞年鑑」を発刊しはじめた。そして、一九四七年二月一八日、米軍政庁学務局から設立を認められた。当時の混乱した社会の雰囲気に屈せず、目標を設定し、方向性を標榜したこのような動きは他の学問と学界に活力を与えることとなった。

白樂濬は、学者として広く知られているが、植民地統治時代から植民地解放後の混乱期において、彼がマスコミ・言論界に与えた影響力はこれまであまり注目されてこなかったと言える。しかし、学者・教育者としての彼がマスコミに対して関心を持ち、それを学問的な体系で発展させるために行った様々な努力について考察することは、彼における他の学問世界の背景をより具体的に理解していくためにも必要なものであると思われる。中国の啓蒙的思想家である梁啓超の「変法自強運動」思想が、植民地下の朝鮮において「愛国啓蒙運動」へと発展していくことに大きな役割を果たした彼は、自らがアメリカ留学で渉猟した西欧におけるプロテスタンティズムとプラグマティズムなどを併せ持つ学問的背景を具備していた。近代的なマスコミ・言論体系に関心を持っていた彼が、植民地統治と植民地解放後の祖国における社会・政治的状況の中でマスコミ・言論に対する問題意識を持ち始めたことは、至極当然のことと

Hosei University Repository

考えることもできるであろう。

自らの論文「The History of Protestant Mission in Korea, 1832-1910」の中で彼は、プロテスタント宣教師たちが展開した新聞・出版などのマスコミ事業に着目し、プロテスタント伝播を「新文化展開の一面」と把握した。彼は、プロテスタントの伝播過程において、聖書出版物の影響が絶対的であったことを次のように説明した。

We have already observed the great effect of the printed page upon the Korean people. The establishment of the Roman Catholic church in Korea, Ross's work among the Koreans in the Manchurian valleys, the conversion of the Korean students in Japan, and the seed-sowing in Korea during the opening days, were all done through Christian literature. The circulation of Christian books and pamphlets has been one of the most effective missionary methods. The Protestant missionaries early realized the need of systematic publication and dissemination of literature.(82)

このような学問的観点を持った彼は、植民地から解放された直後に韓国では初めてとなるマスコミ研究機関、延世大学新聞科学研究所を設立したのであると考えられる。そして、朝鮮戦争が終結した一九五三年には、韓国における雑誌ジャーナリズムを代表する『思想』を設立し、『思想界』への発展を支援した人物であった。白樂濬は、このように近代的なジャーナリズムと言論メディアの役割の重要性を認識していたことから、その導入と現実化を目指したのであろう。

Hosei University Repository

(1) 黄元九（ファン・ウォング）「庸齋と韓国思想」『白樂濬全集』（第十巻）、ソウル、延世大学出版部、一九九五年、九九―一〇〇頁参照。
(2) 金燦國（キム・チャングック）「白樂濬のキリスト教思想と教育」『白樂濬全集』（第十巻）、ソウル、延世大学出版部、一九九五年、一八六頁参照。
(3) 孫仁銖（ソン・インス）「韓国教育と白樂濬先生」『延世教育科学』第五巻、ソウル、延世大学出版部、一九七九年、二一―二七頁参照。
(4) 三谷太一郎『近代日本の戦争と政治』、東京、岩波書店、一九九七年、三〇九―三一一頁参照。
(5) 韓国教育問題研究所　編『文教史、一九四五―一九七三』、ソウル、中央大学出版局、一九七四年、一五八―一六一頁参照。
(6) 白樂濬『韓国の現実と理想』、ソウル、東亜出版社、一九六三年、七二―七六頁参照。
(7) 金仁會（キム・インフェ）『教育と民衆文化』ソウル、ハンギル社、一九八三年、一一一―一一二頁参照。
(8) 白樂濬『韓国の現実と理想』ソウル、東亜出版社、一九六三年、二五九頁。
(9) 前掲書、二三―二四頁。
(10) 白樂濬『わが最終講義録』、ソウル、正音社、一九八三年、二五〇頁。
(11) 金燦國（キム・チャングック）「庸齋の一生、思想、そして学問」、『白樂濬博士の学問と思想』（国学叢書21）、ソウル、延世大学出版部、一九九五年、二一頁。
(12) 在朝鮮アメリカ司令部軍政庁（USAMGK, United States Army Military Government in Korea）：一九四五年九月二日、朝鮮半島の南側に設置されたアメリカ陸軍司令部軍庁を指す。これ以後アメリカ陸軍太平洋総司令官のD・マッカサーは、連合軍司令官の資格により　①朝鮮半島北緯38度線以北の残留日本軍は、ソ連極東最高司令官に降伏すること　②朝鮮半島北緯38度線以南の残留日本軍は、アメリカ陸軍太平洋最高司令官に降伏することなどをその内容とする「一般命令第一号」を発表した。マッカサーは、同年九月九日から朝鮮半島の38度線以南におけるアメリカ軍による統治を宣言、これで朝鮮半島の分断の歴史が始まったのである。―筆者―
(13) 白樂濬「横軸的社会生活」『教会と奉仕』白樂濬全集第四巻）、ソウル、延世大学出版部、一九九五年、三五九―三六三頁参照。
(14) 白樂濬「Progress」『政治と社会』（白樂濬全集第七巻）、ソウル、延世大学出版部、一九九五年、三〇八頁。
(15) 白樂濬「道義教育のための助言」『大学と教育』（白樂濬全集第五巻）、ソウル、延世大学出版部、一九九五年、二二五頁。

Hosei University Repository

(16) 前掲書、二二六頁。
(17) 前掲書一九八頁。
(18) 李成茂（イ・ソンム）『朝鮮の科挙制度』、ソウル、集文堂、一九九四年、二二四頁（引用文　参照）。
(19) 金仁會（キム・インフェ）「教育者としての庸齋」『白樂濬博士の学問と思想』、ソウル、延世大学出版部、一九九五年、三七―三八頁参照。
(20) 白樂濬「Progress」『政治と社会』（白樂濬全集第七巻）、ソウル、延世大学出版部、一九九五年、三〇六頁。
(21) 金仁會（キム・インフェ）『教育史・教育哲学講義』、ソウル、文音社、一九八五年、三六六―三八二頁参照。
(22) 水野直樹「新幹会東京支会の活動について」『朝鮮史叢』（創刊号）、神戸、背丘文庫、一九七九年　参照。
(23) 李文遠（イ・ムンウォン）『新幹会、民族運動の教育史的研究』（延世大学人文学博士学位論文）、ソウル、延世大学人文学研究科、一九八三年、九八三頁参照。
(24) 姜懇淑（カン・ヘスック）『実力養成論者としての安昌浩に関する教育学的考察――社会進化論を中心に――』（延世大学教育学修士論文）、ソウル、延世大学教育学研究科、一九九三年。
(25) 白樂濬「Progress」『政治と社会』（白樂濬全集第七巻）、ソウル、延世大学出版部、一九九五年、三〇七頁。
(26) 金錫得（キム・ソックドゥック）『崔鉉培――学問と思想――』、ソウル、延世大学出版部、二〇〇〇年、三一頁。
(27) 前掲書、二五―二八頁参照。
(28) 金仁會（キム・インフェ）「教育者としての庸齋」『白樂濬博士の学問と思想』、ソウル、延世大学出版部、一九九五年、六八頁参照。
(29) 白樂濬『韓国の現実と理想』（上）、ソウル、東亜出版社、三一二頁。
(30) 白樂濬「University Education Needs to Develop Universal View」『大学と教育』（白樂濬全集第五巻）、ソウル、延世大学出版部、九四―九五頁。
(31) 白樂濬「延世教育の進路」『大学と教育』（白樂濬全集第五巻）、ソウル、延世大学出版部、一九九五年、一六七頁。
(32) 韓国教育問題研究所　編『文教史：一九四五―一九七三』ソウル、中央大学出版局、一九七四年、一三四頁。
(33) 白樂濬「韓国教育の秘話」『大学と教育』（白樂濬全集第五巻）、ソウル、延世大学出版部、一九九五年、四六頁。
(34) 前掲書、四五頁。

Hosei University Repository

(35) 白樂濬「慶北大学開校式辞」『大学と教育』（白樂濬全集第五巻）、ソウル、延世大学出版部、一九九五年、三二四頁。
(36) 李亨行（イ・ヒョンヘン）『新教育行政論』ソウル、文音社、一九八五年、二二五―二二八頁参照。
(37) 李浩盛（イ・ホソン）『教育自治制とその運営』ソウル、韓国教育文化社、一九五四年　参照。
(38) 前掲書　参照。
(39) ①吳天錫（オ・チョンソック）『韓国新教育史』ソウル、現代教育叢書出版社、一九六四年、四〇七―四〇八頁参照。
②洪雄善（ホン・ウングソン）『光復後の新教育運動、一九四六～一九四九朝鮮教育研究会を中心にして』九―一〇頁参照。
(40) 白樂濬『韓国の理想と現実』（上）、ソウル、東亜出版社、一九六三年、一八三頁。
(41) 前掲書、一八五頁。
(42) 前掲書、一八七頁。
(43) 白樂濬「我々に相応しい教育」『大学と教育』（白樂濬全集第五集）、ソウル、延世大学出版部、一九九五年、一〇―一四頁。
(44) 白樂濬「延世教育の進路」『大学と教育』（白樂濬全集第五集）、ソウル、延世大学出版部、一九九五年、一六四頁。
(45) 前掲書、一六五頁。
(46) 白樂濬「University Education Needs to Develop Universal View」『大学と教育』（白樂濬全集第五巻）、ソウル、延世大学出版部、九五―九六頁。
(47) 白樂濬「Foreword of Korea's Self-Identity」「延世教育の理想」（白樂濬全集第三巻）、ソウル、延世大学出版部、五〇九頁。
(48) 白樂濬「我が人生を振替えて」『回顧録』（白樂濬全集第九巻）、ソウル、延世大学出版部、一九九五年、四〇三―四〇四頁参照。
(49) 白樂濬「定見」『随想録』（白樂濬全集第八巻）、ソウル、延世大学出版部、一九九五年、二五八頁。
(50) 白樂濬「Foreword of the Passing of Korea」『歴史と文化』（白樂濬全集第六巻）、ソウル、延世大学出版部、一九九五年、四四一頁。
(51) 洪以燮（ホン・イソップ）「『学誨記略：白樂濬博士小傳』の引用文」、『白樂濬全集』、ソウル、延世大学出版部、一九九五年、二五―二七参照頁。
(52) 白樂濬「今日に相応しい文化教育」『新教育』（創刊号）、一九五〇年一月・二月号。
(53) 洪以燮（ホン・イソップ）「『学誨記略：白樂濬博士小傳』の引用文」、『白樂濬全集』、ソウル、延世大学出版部、一九九五年、二一頁。

Hosei University Repository

(54) 前掲書、三七頁。
(55) 薛盛璟（ソル・ソンギョン）「庸齋の文化認識」『白樂濬博士の学問と思想』、ソウル、延世大学出版部、一九九五年、二五九頁参照。
(56) 白樂濬「実学の現代的意義」『歴史と文化』（白樂濬全集第六巻）、ソウル、延世大学出版部、一九九五年、一三頁。
(57) 前掲書、一〇九頁。
(58) 白樂濬「Looking back over My Lifetime」『回顧録』（白樂濬全集第九巻）、ソウル、延世大学出版部、一九九五年、二一六頁。
(59) 前掲書、一一〇頁。
(60) 前掲書、一一三頁。
(61) 前掲書、一一二頁。
(62) 洪以燮（ホン・イソップ）「『学誨記略：白樂濬博士小傳』の引用文」、『白樂濬全集』、ソウル、延世大学出版部、一九九五年、一一一三頁。
(63) 白樂濬「新しい学問の体系の確立」『随想録』（白樂濬全集第八巻）、ソウル、延世大学出版部、一九九五年、二四七頁。
(64) 張俊河（チャンジュンハ）（一九一八―一九七五）：ジャーナリスト・政治家、一九四五年解放直後、大韓民国臨時政府主席の金九（キムク）の秘書、一九五二年に白樂濬が立ち上げた学術教養誌『思想』誌を引き受ける、一九五三年『思想界』として再創刊、一九六二年韓国最初でマグサイサイ賞（Magsaysay Prize）言論・文学部門受賞、一九六六年朴正熙（パクチョンヒ）軍事政権によって「国家元首冒瀆罪」で逮捕・刑務所服役中、国会議員に当選、一九七一年政界引退後『思想界』の社長・ジャーナリストとして活動、一九七五年朴正熙（パクチョンヒ）軍事政権によって「国家緊急措置法第1号」違反の嫌疑で逮捕・15年刑を言い渡される、刑執行猶予で仮釈放された後民主化運動に全力を尽くす、同年韓国京機道（キョンギドー）抱川市（ポチョン）二東面（イドンミョン）の登山路でスーツ姿の謎の遺体で発見。―筆者―
(65) 張俊河「私と雑誌『思想界』」『張俊河文集』、ソウル、思想界、一九八五年、二八六頁。
(66) 白樂濬「私の周辺」『白樂濬全集』（第九巻）、ソウル、延世大学出版部、四八四頁。
(67) 白樂濬『小河のほとりに植えた樹木――私の人生観――』フィムン出版社、一九七一年、六三頁。
(68) 前掲書、六四頁。
(69) 洪以燮（ホン・イソップ）「解釈『鄭寅普』」、『陽明学演論』、ソウル、サムスン文化財団、一九七二年、二五〇頁。
(70) 張俊河「私と雑誌『思想界』」『張俊河文集』、ソウル、思想界、一九八五年、九六―九七頁参照。

Hosei University Repository

(71) 前掲書、一〇四―一〇七頁参照。
(72) 金璽翰（キム・ソンハン）「主幹という立場としての思い出」『思想界』、一九六三年四月、二七四―二七六頁参照。
(73) 白樂濬「『新聞の日』制定祝辞」『新聞編集人協会報』（創刊号、一九五七年八月一三日字）、新聞編集協会、一九五七年、三―五頁参照。
(74) 前掲書　参照。
(75) 鄭晉錫（ジョン・チンソック）「庸齋と言論」『白樂濬博士の学問と思想』、ソウル、延世大学出版部、一九九五年、二一一頁参照。
(76) 車培根（チァ・ベグン）『中国近代言論史』、ソウル、ナナム出版社、一九八五年、二三一頁。
(77) 李光麟（イ・クァンリン）『韓国開化思想研究』、ソウル、一湖閣、一九七九年、二五五―二八七頁参照。
(78) 植民地時代におけるソウルの旧名。―筆者―
(79) 姜在彦（カン・ジェオン）『韓国の開化思想』、ソウル、比峰出版社、一九八一年、三五六頁。
(80) 白樂濬『我が最終講義録』、ソウル、正音文化社、一九八三年、二六四頁。
(81) 鄭晉錫（ジョン・チンソック）「庸齋と言論」『白樂濬博士の学問と思想』、ソウル、延世大学出版部、一九九五年、一八六頁。
(82) L. George PAIK, "The History of Protestant Missions in Korea, 1832-1910", Yale University Press, 1927, P. P. 146-147.